

龍谷大学における交換留学生を対象とした 「関西方言」授業の実践

The teaching report on the “Kansai Dialect” classes for exchange students studying at Ryukoku University in Kyoto

八 木 和 枝・小 松 知 子
YAGI Kazue・KOMATSU Tomoko

キーワード：

〔関西方言〕 Kansai dialect

〔CEFR〕 Common European Framework of Reference for Languages

〔JEP Kyoto〕 Japanese Experience Program in Kyoto

〔交換留学生対象の日本語教育〕 Teaching Japanese for exchange students

〔複言語・複文化主義〕 Plurilingualism/Pluriculturalism

I はじめに

近年、留学生や技能実習生の増加によって、日本国内で非日本語母語話者の数が増え続けた。2020 年からはコロナ禍の影響で一時的に新規来日数が落ち込んでいるが、長期的な視点で見れば、今後も再び増加に転じることが予測できるであろう。そのうち、多くの人は、ある程度の日本語教育を受けてから来日するが、その際に戸惑うのが、「教科書に載っていない日本語」である。若者ことば、地域特有のことば等を理解できないことが原因で、日本人とのコミュニケーションに積極的になれないという声がよく聞かれる。

これまで、特に、留学生等に対する地域方言の教育は、方言研究においても日本語教育研究においても、30 年以上、その必要性が論じられてきた（伴 1985、佐治 1988、生越 1991、ロング 1992、備前 1996、など）。中でも、佐治（1988）では、関西地区 13 の日本語教育機関調査に基づき、「土地のことばは、聞いてわかる程度には、適当な時期に教えるべき」であり、「それぞれの地域で教えるべき内容を準備する必要がある」と述べられている。また、生越（1991）には、「何を教えるのか」方言の基本文型と基本語彙についての研究が必要であり、「どの程度まで教えるのか」つまり、理解できれば良いのか、話せるまで指導するのか、そして、「学習者の意志の尊重が必要」との指摘がある。

さらに、2007 年には、雑誌『日本語教育』で、より広い意味での「日本語のバリエーションと日本語教育」という特集が組まれている（渋谷 2007、沖 2007、高木・丸山 2007、など）。この特集の趣旨説明で高木らは、バリエーション（多様性）の扱い、教育での取り組みについ

て、非母語話者の生活上重要な問題であると主張している。

しかしながら、大半の日本語教育の現場での方言の扱いは、会話や文化理解の授業の一部で取り上げられたり、質問が出た場合に解説したりする程度であることが多く、管見の限り、大学での留学生向けの日本語授業の1科目として「関西方言」を取り扱った報告はなかった。

一方、高村・内藤（2016）によれば、関西在住の交換留学生に対する「関西方言に対する短期留学生の意識調査」の結果、レベルに関係なく、関西に対して好意的であり、大学や自然習得で関西方言を勉強したいと考えている留学生の姿が明らかになっている。また、交換留学生に関しては、「少なくとも来日直後に地域方言の概要を日本語、あるいは英語で説明すべき」であり、「教育機関で体系的、かつ明示的に説明を行うことが、留学生の地域方言に対する満足度を高めることにつながる」と主張されている。

上記調査の結果と同じく、龍谷大学でも受入交換留学プログラム「Japanese Experience Program in Kyoto（以下、JEP）」のプロジェクト型学習活動の中で関西方言が取り上げられるなど関心の高さが見られ、留学生へのニーズ調査の結果においても関西方言学習の要望が最も多かった。それを受け、2017年度からJEPの日本語授業の1科目として「関西方言」を開講することになった（福田・小松 2018）。本研究は、2017年前期から2020年前期までの3年半の実践の内容と結果について、オンライン上にある既存の方言資料の活用や日本人学生との交流、方言調査活動といった様々な活動とその効果を中心に報告するものである。

Ⅱ コースと授業の概要

龍谷大学において交換留学生とは、大学間の交換留学協定によって半年あるいは1年間龍谷大学で学び、所属校に戻っていく短期留学生を指す。学生の専門に応じて希望の学部へ所属するが、教務的受け入れはグローバル教育推進センターが担い、JEPを運営している。4月に始まる前期と9月に始まる後期があり、どちらの学期にも入学生を迎える。交換留学生のほとんどが、京都市伏見区にある「深草キャンパス」近くの寮に居住し、生活している。

1 コースの概要

JEPは、2015年に、それまで予備教育コースである留学生別科で受け入れていた受入交換留学生を分け、対象を特化したプログラムとしてスタートさせたものである（三原 2018）。JEPには必修科目としての「日本語関連科目」と「日本事情科目」「特別講義」等の選択科目があるが、本稿では、「関西方言」が開講されている日本語関連科目群を「JEP」として述べることにする。

JEP全体は、6つのレベルに分かれている。『ヨーロッパ言語参照枠』（Common European Framework of Reference for Languages：以下、CEFR）を参照し、ブレースメントテストでCEFRに準拠した言語の熟達度を測定し、クラス分けが行われる。レベルが上がるにつれ、技能別科目が増える（小松、福田 2016）。関西方言の授業は、JEP5、6の2レベルの学生に開講されている（表1参照）。自分のレベルで11単位取得できるが、希望で上下のレベルを選択的に履修することも可能となっている。なお、JEP4以上のレベルではJEP科目の代わりとして学部授業の履修が認められている。

表 1 JEP 開講日本語関連科目例（2017 年度前期の場合）

クラス	CEFR レベル	JEP開講科目										
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
JEP6	B2～	総合		アカデミック・ ジャパニーズ		ビジネス 日本語	関西方言	口頭表現	文法	視聴解	読解	HR
JEP5	B1.2			アカデミック・ ジャパニーズ		ビジネス 日本語	関西方言	口頭表現	文法	視聴解	読解	
JEP4	B1.1	総合						文章表現	文法	視聴解	読解	HR
JEP3	A2.2	総合						文章表現	文法	視聴解	読解	
JEP2	A2.1	総合								視聴解	読解	HR
JEP1	A1	総合								視聴解	読解	

2 授業の概要

(1) 「関西方言」開講の背景

JEP 開始 3 年目の 2017 年度、「関西方言」が 1 つの科目として開講されたのには、大きく 2 つの要因がある。第一に学生たちの要望、第二に CEFR の複言語・複文化主義の考え方への賛同である。

まず一つ目の学生たちの要望であるが、2015 年度後期「JEP5、6 総合」授業での調査結果と、それを受けて実施された 2016 年度後期学生へのニーズ調査の結果による。「JEP5、6 総合」は、先にあげた表 1 からわかるように、週に 2 コマ、2 レベル合同科目である。日本人や日本語資料から情報収集し、記事や映像を作ったり、発表したりするプロジェクト型の活動で進められる。この授業のプロジェクトワークにおいて 1 つのチームが「関西弁に関する日本人学生の意識調査」というテーマで、大学のキャンパスで日本人学生にインタビューを行ったところ、日本人学生から「留学生が関西方言を話すこと」を好意的にとらえる意見が多いことがわかった。学生の調査結果と映像作品の発表によって留学生達は勇気づけられ、関西方言を学びたいという動機付けが高まったのを目の当たりにしたことがニーズ調査につながった。2016 年度後期学生へのニーズ調査では、72 名の回答があったが、調査結果としては、1 位が「関西弁」（19 名）、2 位が「発音・イントネーション」（15 名）と、留学生からの「関西方言」を学んでみたいという要望の多さが 1 番に挙げられていた。

もう一つは、CEFR で提唱されている複言語・複文化主義への賛同からである。ヨーロッパを発祥の地とする CEFR では、複言語・複文化主義が平和の礎として言語政策理念の柱となっている。日本における日本語は、「国語」と呼ばれ、一つの言語であるかのように意識されているが、実際はヨーロッパにおける一言語に相当するほどの複数言語が「方言」として存在している。地域言語である「関西方言」を学ぶことは、生活語として役に立つばかりでなく、他方では学生たちの言語レパートリーを広げるもの、すなわち、もともと持っている複言語・複文化能力をより豊かにすることにつながると考えられるためである。

(2) 授業で扱う「関西方言」について

「関西方言」については、「関西（特に、京都・大阪を中心とした地域）で日常話されていることば」とし、言語体系としての関西方言という意味で用いる。ただし、個別の形式を指す場合（例：「あかん」って方言？）など、地域差のある語彙や表現を意味して使う場合もあると

いうことを学生に説明した。

また、2017年後期に「JEP5 関西方言」受講生たちが主体になって、キャンパスで行った「関西ことばの調査」（被調査者：330名）によると、キャンパスにいる日本人学生にランダムに声をかけて出身都道府県を聞いたところ、以下のような結果となった。第1位「大阪府」119名（36%）、第2位「京都府」85名（26%）、第3位「滋賀県」37名（11%）、以下、第4位「奈良県」26名（8%）、第5位「兵庫県」14名（4%）、「その他」49名（15%）と続く。

人数としては、大阪出身者が多いことがわかったが、大学は京都市に位置し、生活の場も京都が中心となる。そのため、この授業では、京都・大阪を中心とする関西で、日常的に話されていることば、例えば、花（はな：アクセント高低）、～ヤ（断定辞）、食べヘン（否定辞）、アカン（語彙）などを「関西方言」として扱うこととした。

授業担当者の頭の中では、高木（2005：142-143）にあるような関西若年層談話に現れた方言形式を想定して授業を行った。例えば、音声的変異については、1拍名詞長音化・長音の短縮・ナ行音の撥音化（もの→モン）・動詞の撥音便形・サ行音の[s]→[h]・縮約形など、文法項目としては、助動詞のス／サス（使役）・シトル・シヨル・シテマウ・シトク・シハル、文末表現のチューネン・デ・ナ・ネン・テン・ヤンカ・ワ、助詞脱落のト抜け・ニ抜けなど、活用では、ワ行五段動詞ウ音便形・形容詞音便形・命令形（セー）・「言う」の未然形／連用形／命令形（ユワレル、ユッタ、ユエ）・形容詞語幹による感嘆表現（メンドクサ、アマー）などである。語彙項目は、挙げるときりがないが、代表的なものでは、名詞（～回生、ホンマ）・イ形容詞（エー、オモロイ、シャーナイ）・動詞（チャウ、アラヘン、モータ）・接続詞（セヤケド、チューカ、ホンジャ、ホンデ）などがある。

さらに、泉（2012）、大原（2008）と木部他（2014：64-67）で紹介されている「関西的な会話スタイル」「会話スタイルを支えるコミュニケーション意識」なども参考に、京ことば特有の表現や、関西における言語コミュニケーションの文化的側面にも留意した。

(3) 受講生

上で述べたような背景により開講されたJEP5,6の「関西方言」授業の各クラス受講人数は、表2の通りである。2020年前期までに、述べ93名（うち連続受講生4名）の学生が受講した。出身国・地域は、16に及ぶ。2020年前期は、コロナ禍の影響で、新入生が来日できなかったため受講者が少なく、オンライン（同時双方向型：Zoom使用）での授業実施となった。

表2 「関西方言」クラスの受講生数

		2017年前期	2017年後期	2018年前期	2018年後期	2019年前期	2019年後期	2020年前期
クラス	JEP6	6	3	5	3	6	4	3
	JEP5	13	13	13	6	7	9	2

(4) 授業の目標

授業の目標について、当初は、以下のように考えていた。

- ・京都弁を含む関西方言の特徴、言語コミュニケーションの文化的側面が理解できる。

- ・大学や地域での生活の中で関西方言話者の会話がある程度聞き取れる。
- ・基礎的な関西方言を使った会話ができる。特に、学生同士でよく使う表現などが使える。

しかし、音声面の特徴が標準語（共通語）と明らかに異なる「関西方言」を話すことの指導をどこまで徹底してできるのか、「関西方言」を話す練習をすることによる悪い影響が出てくるのではないかと考えるようになった。そのため、2017 年前期から 2018 年前期までは、「関西方言」を聞いて理解する力を中心にすることを目指し、次のような目標をたてた。

- ・日本語の多様性について認識し、その理由や背景についても理解できる。
- ・関西方言についての知識を得て、実際に聞いて理解したり、会話に参加したりできる。
- ・授業で学んだ関西方言に関する知識や聞き取りの力を活かし、大学周辺の関西方言の実態を調べ、発表をすることができる。

ところが、3 学期ほど続けていると、「話す練習がしたい」という学生の声が多く聞かれるようになってきた。「話すことによって、聞き取る力が向上する」という意見も強くあった。そこで、2018 年後期からは話す練習にも積極的に力を入れるようになった。具体的には、以下のⅢ章で述べるが、学生の意見通り、話す練習を行ったほうが、聞き取る力も正確になり、使い分けの意識についても育つようであった。

ただし、京阪式アクセントや関西方言のイントネーションでまとまった内容を話したり、会話をし続けたりすることは、非常に難易度が高い。高校生時代に関西に留学した経験を持つ学生やホームステイ先やアルバイト先など、ふだんから関西出身の学生と話す経験を教室以外にも多く持っている学生はよいが、そうではない学生に同じような環境を授業だけで提供することはできていない。それでも、学生が希望すれば、そういった環境に自ら入っていけるよう、基礎的な関西方言の運用能力やストラテジーを身につけられる授業にしたいと考えるに至った。

Ⅲ 実際の授業内容

ここからは、実際の授業内容について説明していきたい。まず、学生に配布するシラバスから、講義概要、到達目標、講義方法について抜粋したものを下に示す（2018 年度後期 JEP5 関西方言）。

【講義概要】

この授業は関西方言の学習をします。日本語の多様性を知ることや関西方言の知識を得ることだけでなく、実際に聞いて理解するための力や、会話に参加できるようになるための力を身につけます。また、関西独特のことばを京阪式のアクセントで発音する練習も行います。

【到達目標】

このクラスの目標は、以下の通りです。

1. 日本語の多様性について認識し、その理由や背景について理解できる。

2. 京都弁を含む関西方言の特徴、言語コミュニケーションの文化的側面が理解できる。
3. 身近な話題や経験した内容であれば、関西方言話者の会話を聞いて、理解できる。
4. 学生の関西方言を使った会話に、詳しい説明を求めたり自分の理解したことを確認したりしながら参加できる。
5. 標準語と関西方言の異同について認識し、場や参加者に応じて使い分けを心がけることができる。

【講義方法】

前半は、関西方言の音声データを使い、聴解の練習を行います。その際、標準語との相違に着目しながら、関西方言の音声、語彙、文法、談話における特徴、便利な言い回し、等について整理します。後半は、関西の「お笑い」を含む、言語コミュニケーションの文化的側面について調査し、発表を行う予定です。フィードバックや評価のために活動を録音・録画することがあります。

1 セメスター 15 回分の授業の例として、同じく 2018 年後期 JEP5 の実践例を表 3 に示す。

表 3 JEP5 関西方言の授業実施

第1回	オリエンテーション／簡単な関西方言の会話
第2回	方言の多様性（日本各地の方言）／関西方言の歴史的位置づけ
第3回	基本的な京都ことばの特徴／ロールプレイ会話＜依頼＞
第4回	ロールプレイ会話＜なぐさめる＞
第5回	ロールプレイ会話＜確認＞
第6回	関西出身日本人学生との交流（大阪弁トランプからよく使う言葉を 25 選ぶ）
第7回	関西出身日本人学生との交流（ロールプレイ会話＜遅刻の連絡＞／「関西弁の謎」視聴）
第8回	聴解試験
第9回	方言調査活動（「お笑い」調査：漫才のことば ナイツ）
第10回	方言調査活動（「お笑い」調査：漫才のことば サンドウィッチマン）
第11回	方言調査活動（「お笑い」調査：関西弁漫才 NON STYLE／ジャルジャル／和牛）
第12回	方言調査活動（発表準備）／「京都人の密かな愉しみ 冬」視聴
第13回	方言調査活動（発表準備）／「京都人の密かな愉しみ 冬」視聴
第14回	方言調査活動（発表／座談会「漫才は、関西方言の学習に役に立つかどうか」）
第15回	フィードバック／「京都人の密かな愉しみ～京都人の本音～」視聴

簡単な導入のあと、日本における方言の多様性を知り、関西方言の音声・文法・語彙の特徴を学び、ロールプレイ会話を聞く。そこまでの知識や練習を活かして、実際に、関西出身大学生との会話を体験する。これらの活動の中から、自分が興味を持ったものに関して方言調査活動を行う。その際、発表のことばと方言の使い分けにも留意する。まとめると、図1のような流れになる。合間には、関西を舞台にしたドラマやYouTubeを視聴することもあり、視聴後ディ

スカッションを行うことにより、社会文化的な知識も深めていく。



図1 「関西方言」授業の流れ

次に、これらの中から、1) オンライン上の教材の活用、2) 日本人学生との交流活動、3) 方言調査活動の順にまとめたい。

1 オンライン上の教材の活用

オンライン上には、方言学習に活用できる教材や方言談話資料が多く蓄積されている。その活用について、具体的に授業でどのように使ったか、学生の反応はどうだったかを中心にまとめる。

(1) 国際交流基金関西国際センター「KC クリップ 方言」(第1回授業にて使用)

この教材は、「買い物場面」の会話をもとに、関西方言の主な特徴が、音声・文法・語彙に分けて学べるオンライン上の教材である。スライドと音声も完備されている。ダウンロードをしておく必要があるが、非常に使いやすく、わかりやすいので、関西方言の導入に使用した。非常に好評であった。

(2) 方言文法研究会「全国方言文法データベース 原因・理由」(第2回授業にて使用)

これは、日本語教育用のものではないが、1つの会話例が、全国の6地点（青森・東京・富山・関西・中国地方西部・沖縄）の方言で発話されており、スクリプトでも確認できる。学生にどの地点のものを聞いてみたいか選ばせて、まずはスクリプト無しで、音声のみを耳で味わってもらおうとしよう。聞いてよくわかるか、だいたいわかるか、全然わからないか、それから、関西のことばと似ているか、違うか、などの印象を話してもらうとディスカッションにつながり、日本の方言の豊かさと地域別の特徴を学ぶことができていた。

(3) 国立国語研究所「方言ロールプレイ会話データベース」(第3～7回授業にて使用)

2018年前期までは、ロールプレイ会話は、ほぼ聞くだけか、日本人学生との交流時間に少し練習する程度であった。JEP5はポイントがわかること、JEP6は細かいところまでできるだけ聞き取れるようになることを目標としていた。前述のとおり、2018年後期からは積極的に発話練習に使うようになった。長いセリフは、JEP6でも難しいようであったが、短くてよく使うフレーズや、若者言葉に興味を持って、活動していた。今後、さらに活用できるように思われる。

2 関西出身日本人学生との交流

セメスターの中盤あたりに、学内の関西出身日本人学生にボランティアで「関西方言授業」

に参加をお願いして会話や意見交換などの活動を行ってきた。学期によって、2～3回、受講留学生の数に合わせて、グローバル教育推進センターを通して、ボランティアでゲスト参加してくれる日本人学生を募っている。

日本人同士でも、方言で会話するには、ある程度親しい間柄であることが必要である。大学の教室で授業中に相手が初対面の留学生となると、なかなか自然な関西方言での会話が難しくなる。様々な失敗を経て、ルールや活動をあらかじめ設定することとした。

まず、授業の冒頭の簡単な自己紹介（呼んでほしい名前と出身地）の後は、「です・ます禁止」を徹底することにしている。やや不自然かもしれないが、このルールを決めておくことで活動がスムーズに進む。

次に、グループに分かれた後、もともとは交換留学生の経験からのアイデアだったが、「うそはどれ？」という自己紹介活動を行う。自分について語る文を1人3文ずつ準備するが、必ず1つはうその情報にしておき、聞いている人はどれがうその情報かを当てるというものである。うその情報を当てるために、よく話を聞き、質問をたくさん考えるので、よい練習になる。単純なうそでも盛り上がるので、自己紹介が終わる頃には仲良くなっていることが多い。この活動の前に、授業担当者がモデルとして実演し、3つの自己紹介文からうそを当ててもらおうとよいかもしれない。意外なうそを準備すると場が盛り上がり、学生同士の活動も進みやすくなるようである。

その後は、テーマを自由にしてもどんどん話がはずむグループと、「何か話のテーマがほしい」というグループが出てくる。そのため、各回1つは、タスクを設定して協働を課すことにしている。例えば、1つは、関西弁を紹介するテレビ番組を視聴して、意見交換をするものである。もう1つは、市販の「大阪弁トランプ」を使った活動である。52枚のカードに書かれた大阪弁のことばの中から日本人学生によく使うものを25枚選んでもらい、最後に留学生が選ばれた言葉を発表する。

グループ分けについては、留学生と日本人学生が、2～3人对2～4人が1グループになるのがよいように思われる。グループでキャンパスの好きな場所まで移動してもよいことにして、自由に活動を行ってもらっていた。

そして、教室にもう一度集まってもらい、ロールプレイ会話をいっしょに聞き、日本人学生に実演をお願いする。留学生からは、質問を受け付け、音変化や意味のわからないところなどの疑問点を解消する。その後、グループや、少人数に分かれ、日本人と留学生で演じてみて、聞いている日本人学生に助言をもらったりしながら練習する。授業の最後には、コメントシートを記入してもらい、終了という流れが多かった。

日常的によく日本人学生と交流がある学生にとっては、ふだん話せない高年層の方と話したかったという声もあった。人数のバランスが悪いとき、話が盛り上がりえないグループもできてしまうが、多くの留学生から、一番楽しかったという評価の得られる活動である。

3 方言調査活動

ここまでの活動をふまえ、最後に、関西方言をさらに深く知るために方言調査活動を行う。方言調査活動は、学期ごとに活動が異なっている。以下に活動例を示す。

(1) 2017 年度前期の活動 作成物：ビデオ／ハンドブック

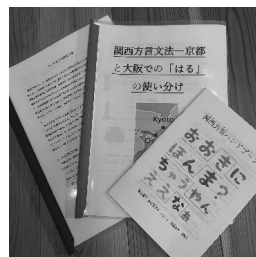
2017 年前期は、「関西方言」授業が始まって最初の学期だったこともあり、前例がないため、クラスの自主性に任せて、学生たちに活動を考えてもらうことにした。そのため、JEP5 と JEP6 とで、異なる方言調査活動を行うことになった。JEP5 は「関西方言ビデオ」の作成に決まり、4つのグループに分かれて、関西方言の学習に役に立つビデオの作成に取り組んだ。以下は、作品のタイトルである。

- ①「関西弁でこんな時に何と言う？」
- ②「関西弁 vs. 京都弁～2 人のタイ人は、異なる出身の日本人に発音していただいた～」
- ③「コメディー『Kansai comedy』」
- ④「自分の方言の中で、聞いてわからなかった表現はありますか？」

機器関係の問題を除くと、グループの人数が4人以上になった場合、負担感の差が出てしまうことが大きな問題としてあった。また、ビデオの編集作業は、多くの時間を費やすことになるため、1 単位の授業の課題としては、全体に負担が大きくなってしまった。ただし、学生たちの満足度は概ね高かった。

JEP6 では、6 人の主体的な話し合いの結果、「関西方言ハンドブック」の作成に取り組むこととなった。目次を下に記す。

目次 「方言とは？日本の方言 日本全国の方言例」
「関西弁についてどう思う？—非関西弁話者編—」
「関西弁についてどう思う？—関西弁話者編—」
「関西方言の音声：ここが面白い！」
「関西方言の文法：ここがちがう！」
「日常生活でよく使う関西弁会話例」
「関西方言のことば辞典～京ことばを中心に～」



写真：学生の作成物

次年度の「JEP6 関西方言」履修生に配布、好評を得ていた。

(2) 2017 年後期 発表：関西のことば キャンパス調査＋日本語方言学専門家講演会

JEP5 では、「関西のことば調査」文法・語彙調査として、岸江・井上（1997）『京都市方言の動態』をもとに、1 人 1 項目を担当し、30 年前の報告の内容をまとめ、特に若い世代の変化を予測したうえで、キャンパスにいる学生に調査を行い、結果を発表した。

JEP6 では「関西のことば調査」談話調査とした。関西方言話者の談話を収録し、居住寮の管理人へのインタビューから改まった場でも使われる関西弁をまとめたり、関西弁の表現を学びやすさの面から 3 段階に分類したり、独自の視点で考察した結果を発表した。

また、発表会には中島由美先生をお招きすることができた。三線や三味線の音色とともに、地唄、義太夫、長唄を体全体で味わい、京文化、上方文化と江戸文化との比較について貴重なお話を伺った。日本の中での文化の相違とその背景への理解が深まる講演会であった。

(3) 2018 年前期 作成物：ハンドブック

JEP5 は、「聞いてわかる！言えると便利！関西弁の表現」をテーマに、ハンドブックの作成に取り組むこととなった。本やインターネットで調べたり、関西出身の日本人学生に聞いたりしながら、1人1項目まとめ、中間発表で進捗を報告し、クラスメートのアドバイスをふまえて、まとめたものを1冊のハンドブックにまとめた。選ばれた項目は、以下の通りである。

「京都と大阪での『はる』の使い分け」／「わからへんー関西の否定形」
「Vんとあかん・Vなあかん」／「や」／「ちゃう」／「ほんま」／「ぼちぼち」
「マジで・ガチで（注：頭高でなく中高アクセント）」／「しんどい」／「めっちゃ」
「なおす」／「フレッシュ（注：コーヒーミルク）」／「知らんけど」

JEP6 は、それぞれの興味に応じたテーマを決め、ハンドブックの原稿を作成した。選ばれたテーマを以下に示す。

- ①「バイト先での関西方言」
- ②「めっちゃ使いやすいやつを選んだ！勉強してくれへん？」
- ③「インタビューから関西弁の特徴を見る」
- ④「実際にバラエティー番組で使われた関西弁」
- ⑤「標準語ではなく関西弁だと?!」

(4) 2018 年後期 劇：漫才の再現

この学期から、話すことにも力を入れる方針を決め、方言調査活動についても、漫才を取り上げることにした。野田・野田（2017：143-147）を参照し、まずは、漫才の笑いの仕組みをおさえたうえで、標準語の漫才について聞く練習を行い、その後、関西出身芸人のコントや上方漫才の聞き取りに挑戦した。その際、小矢野（2004）、日高（2017）なども参考にした。選ぶ漫才によって完成度としては下がってしまっていたが、様々な方言調査活動の中で、この活動の学生満足度が最も高かった。

(5) 2019 年前期 発表：関西らしい動画紹介—取り出したフレーズの発話練習

漫才の長いセリフよりは、短いフレーズを練習できるようにと、「関西らしい動画を探して紹介する」というテーマで活動を行った。発表するだけではなく、その中のフレーズをクラスメートに教えるというタスクも付け加えた。学生はそれぞれが好きだったドラマやアニメを紹介し合い、YouTube から、京都市交通局作成のアニメ、関西出身芸人のコントなどを選んで発表していた。

(6) 2019 年後期 劇：ロールプレイ会話の再現

スライド作成やハンドブックなどの作成にはかなり時間を費やす。1単位の授業にしては負担が大きくなりすぎるという懸念があった。そこで、この学期は、「方言ロールプレイ」の会話の中から1つ選んで、タイミングや重なりまで同じように再現してみようという課題を設定した。

寮の共用スペースで練習していると、「おっ（関西弁！すごっ）」という顔で見られるという、うれしい報告もあったが、ペアでの活動になるため、問題もあった。ペアが仲良く練習できる場合はいいが、学期末の課題が忙しい時期と重なり、一人が寝坊で欠席してしまったペアも1例出てしまい、残念であった。JEP6では、間や重なりまで、かなりよく再現できているペアもあった。

(7) 2020 年前期 発表：使える便利な関西弁のフレーズ

オンライン（Zoom ミーティング）は、間の取り方が難しく、漫才やロールプレイ会話の再現といった活動には不向きであった。そこで、発表準備に時間をとられてしまうが、個人発表にした。準備期間を長めに設定し、日本人学生との交流時から、龍谷大学の学生同士の会話でよく使うことばを調査する課題にした。例としては、「まじオモロイ」「めんどっちい」「なんしか」「いちびり」「シュツとしてる」「何ゆうとんねん」「なんて（聞き返す）」「ちよっ」「なんやろう」などが選ばれていた。アクセントやイントネーションなど音調まで、うまく発話できている発表が多かった。

Ⅳ 考察

ここでは、各学期の初日と最終日に行う学生の自己評価から授業の成果について考えていきたい。各学期の項目別スコアの平均を表4に示す。各レベル別の到達目標 can-do について、「1: まったくできない」「2: すこしできる」「3: だいたいできる」「4: よくできる」の4段階から選ぶ形式で行っている。4つの項目は、それぞれのクラスレベルの到達目標による。例えば JEP5 であれば、「社会言語知識」は、学生配布シラバスにある到達目標の「2. 京都弁を含む関西方言の特徴、言語コミュニケーションの文化的側面が理解できる」、「聞く」は「3. 身近な話題や経験した内容であれば、関西方言話者の会話を聞いて、理解できる」、「やりとり」は「4. 学生の関西方言を使った会話に、詳しい説明を求めたり自分の理解したことを確認したりしながら参加できる」、「社会言語能力」は「5. 標準語と関西方言の異同について認識し、場や参加者に応じて使い分けを心がけることができる」である。この結果から、全体として、どの目標についても、学生の自己評価が伸びている傾向がわかる。

表4 自己評価スコアの変化（2017 年前期～2019 年後期）

	JEP5 初日	JEP5 最終日	JEP6 初日	JEP6 最終日
社会言語知識	1.6	3.1	1.4	2.9
聞く	2.2	3.2	1.5	3.0
やりとり	1.9	3.3	1.5	2.7
社会言語能力	2.1	3.2	1.5	2.8

また、授業の感想の自由記述にも、以下のような肯定的な意見が多く見られた。（年度順）

- ・授業を受ける前は、「やで」「やな」「わ」などは、あまりわかりませんでしたから、その文章はどの感じで言ったのか少し理解できませんでした。ただ、今はだんだんわかるようになって

たと思います。

- ・授業を通じて、方言とは何か、日本の方言の違いや、関西弁のイントネーション、語彙、表現をより理解できるようになった。それで、バイト先の関西の人と接した時に、関西弁がわかって、会話がよりスムーズになった。バイト先の皆がほめてくれたので、うれしかった。
- ・関西方言に興味があるので、楽しかったです。また、番組とか調査とかもやるのが面白かったです。今、日本人と話すときに関西方言を使えるので、うれしいです。
- ・関西方言の授業を通じて、関西弁を聞いた時、すぐ文法と場面などを考えて、そして真似することができます。
- ・関西方言をもっとわかるようになりました。大阪弁と京ことばのちがいがもう少しわかるようになりました。日本人の学生との会話が楽しかったです。
- ・もともとはキーワードで関西弁がちょっとわかったんですけど、今はもっと詳しく語尾とか細かい部分までわかるようになった。
- ・ロールプレイを聞くのは、一番役に立つと思う。
- ・関西方言を聞くと、前よりその内容をよく理解できてよかったと思います。それと同じ言葉でも地方によって使い方が（アクセントとか）違うことを分かるようになってよかったと思います。
- ・春学期でも勉強しましたが、今回もう一回やって、日本のいろいろな方言の特徴がもうちょっとはっきり分かってきました。テレビ番組を見て、他の世代の人が話す関西弁も聞いて、よかったなと思いました。
- ・授業で漫才などの映像を見て、自然な関西方言が練習できたところがうれしかった。また、発表のため、自分で関西方言が使われている映像を探してみたり、フレーズを何度も繰り返して練習したりする間、いろいろな関西方言が勉強できて役に立ったと思う。
- ・方言学の面白さを感じました。
- ・音調など本当に難しいと思ったが、授業でロールプレイ会話を聞くことやテレビ番組を視聴することを通じて、どんどん自然に話せるようになります。時々日本人の友達としゃべるとき、関西人っぽいと言われたこともあります。
- ・本当に授業のおかげで、関西方言を聞き取れたり、日本人の友達と方言で会話できたりするようになりました。
- ・授業で日本人の学生と一緒に日本語を勉強することは楽しかったと思います。そのおかげで、友達もできれば、関西方言もいっぱい習いました。
- ・はじめて漫才がわかるようになった。また、日本人の学生たちと話し合ったこともあって、楽しかった。

一方、授業改善に向けての意見としては、次のものがあつた。詳しく見てみる。(年度順)

- ・正しいイントネーションを使えるようになりたい。
- ・もうちょっと関西方言の文法を勉強したかったです。(漫才は役に立ちました。)
- ・もっと方言の会話の練習をすれば、よかったかなと思います。

1つ目の指摘は、カナダの学生（母語はロシア語）からであつた。まだ、話すことを扱って

いなかった学期の受講生だが、YouTube で関西の番組に精通し、アルバイト先での交流から関西弁をある程度習得しており、「関西弁こそが自分の日本語です」と話すほどだった。それでも、イントネーションの難しさを訴えていた。

2つ目の指摘は、フランスの学生からであった。高校生時代に、大阪の高校に留学していた経験があり、初めに習得したのが大阪のホストファミリーと高校の同級生の言葉だったので、いわゆる、自然習得で大阪弁が話せるようになっていた。クラスでも自然なイントネーションで関西方言が話せるので、クラスメートの目標のような存在であり、自分たちもそうなりたいと周りの留学生のモチベーションが上がっていた。自然習得だったので、日本人が「関西方言」の文法を説明するのが難しいのと同じように、話せても文法についての説明が苦手だったようで、もっと詳しく知りたいと話していた。標準語と関西方言の違いを知ること、改まった発表スタイルの日本語にも磨きをかけていた。

3つ目の指摘は、中国の学生からであった。日本人との交流の授業で、日本人学生からロールプレイ会話のイントネーションの指導をかなり厳しく受けていたので、「関西弁が嫌になるのではないか」と心配になるほどであったが、実は、この指導がとても良かったとのことだった。この次の学期にも、継続して「関西方言」を受講した。その際、Zoom のチャット機能で、短いものであれば、「打ちことば」(田中 2014)としての「関西方言」を使うことができていた。アルバイト先で、年配の方に話しかけられることがあるそうで、高年層の「関西方言」の聞き取り練習にも挑戦したいと話していた。余談であるが、帰国後は、クラスメートに関西方言を教えているという。

これらの指摘からもわかるように、1) 授業で扱う文法項目の設定、2) 関西方言のイントネーションの練習方法の確立、3) 関西方言スタイルでの会話の練習、4) 違う世代の関西方言の聞き取り練習、の4点の精緻化が授業の課題として挙げられる。また、これまで授業で扱ってこなかったが、「打ちことば」としての関西方言についても、学生たちは日常的に LINE 等のやりとりを行う頻度が高いため、練習することを考えていきたい。

さらに、学生たちが教室外でどのように関西方言を使ってやりとりをしているのか、その実態については明らかになっていない。まずは、教室に日本人学生をゲストに迎えたときのやりとりなどのデータを集め、接触場面で方言に関わるどのような問題が起こっているのか、分析していくことが求められるだろう。これまで学生に質問してみたところ、「べっぴんさん」という言葉を知らず、けんかを売られていると思った例や、アルバイト先のコンビニで(コーヒーに)砂糖を入れますかと聞いたとき、「入れんとく」と言われたのに「入れとく」と理解し、砂糖を入れて客に渡してしまった失敗などが出てきた。引き続き、検討していきたい。

V おわりに

この研究では、高等教育機関における短期交換留学生を対象とした「関西方言」授業の実践例を紹介し、その結果を受講生の自己評価や自由記述から考察した。教室での活動の様子、作成物や発表によって、一定以上の関西方言の運用能力が身につくことが明らかになっているが、詳細については、まだ研究が及んでいない。また、教室外での実態について、今後、調査していく必要がある。可能であれば、より客観的な評価による授業効果の検証も行うべきであろう。その方法としては、例えば、関西方言の聴解について、同じ難易度の事前テストと事後テスト

を作成し実施することや、さらに、同レベルの本科目を受講していない学生にも同じテストを行うことが考えられる。今後の課題としたい。

さて、最後に、本稿の第Ⅱ章2節の中で述べた複言語・複文化主義に立ち返ってみたい。西山(2010)は、この複言語・複文化主義の受容について、CEFRの共通参照レベルへの注目と「いわば反比例」していると述べ、日本における複言語・複文化主義の軽視に警鐘を鳴らしている。また、欧州評議会言語政策局／山本訳(2016)を引用し、「複言語・複文化主義は、さまざまな言語をさまざまなレベルで学習し、コミュニケーションに活用することを通じて、言語の価値はみな等しく、それぞれ固有の価値を持つことの理解を訴えることにある」とその重要性についてふれている。さらに、「個人が言語レパートリーを広げるよう、教育制度や教育文化を整備することが複言語・複文化主義にとって重要な意味を持つこと」も指摘している。

日本の国語教育における方言教育の進展(大野・杉本 2020)や外国にルーツを持つ児童・生徒への母語指導の重要性の浸透、言語への目覚め活動(大山 2016)など、日本でも複言語主義教育が受け入れられつつあるように思われる。こういった動きにより、異文化への関心や理解のある社会へと日本が変容していくことが真に望まれている。

龍谷大学における「関西方言」授業も、授業方法としては、まだまだ未熟であるが、複言語主義教育の取り組みの一環となるべく試行錯誤をしている。関西方言に興味を持つ留学生が、日本語の中のバリエーションである関西方言を用いる力やその文化の経験を持つことによって、言語レパートリーを広げ、まずは留学先である京都を中心に、また、最終的には、日本中、世界中のどの場所へ行っても、社会的なエージェントとして、「わたしの言葉」をもって、コミュニケーションにより深く参与できる能力を育てることを目指していきたいと考えている。

そして同時に、これらの活動を通して、複言語・複文化能力を備えた留学生たちの姿が日本人学生や日本人をはじめとする地域社会の人々への刺激となり、多文化共生の豊かでポジティブな未来像を共有するきっかけとなることを期待している。

謝辞

本稿は、日本方言研究会第106回研究発表会にて発表した内容をもとに、その後の実践を加えてまとめ直したものである。貴重なコメントをくださった会場の皆様に心より感謝申し上げます。

参考文献

- 泉文明(2012)『京ことばとその周辺』晃洋書房
- 欧州評議会言語政策局／山本訳(2016)『言語の多様性から複言語教育へーヨーロッパ言語教育政策策定ガイド』くろしお出版
- 大野眞男・杉本妙子(2020)『実践方言講座第2巻 方言の教育と継承』くろしお出版
- 大原穰子(2008)『京ことばの辞典』研究社
- 大山万容(2016)『言語への目覚め活動』くろしお出版
- 沖裕子(2007)「談話論からみた方言と日本語教育」『日本語教育』134号 pp.28-37
- 生越直樹(1991)「日本語教育と方言」徳川宗賢・真田信治編『新・方言学を学ぶ人のために』pp.231-241
- 岸江信介・井上文子(1997)『地域語資料3 京都市方言の動態』近畿方言研究会

- 木部暢子・竹田晃子・田中ゆかり・日高水穂・三井はるみ（2014）『方言学入門』三省堂
- 小松知子・福田えり（2016）「龍谷大学交換留学生のための日本語プログラム “JEP Kyoto” —プログラム開発と『ビジネス日本語』コースデザイナー—」日本語教育通信日本語教育レポート 第33回国際交流基金 〈<http://www.jpfi.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/report/201611.html>〉 2021年1月18日閲覧
- 小矢野哲夫（2004）「大阪的談話の特徴—ボケとツッコミ—」『日本語学』9月号 pp.42-52
- 佐治圭三（1988）「日本語教育における位相の問題—日本語教育と関西方言とのかかわりを中心に」『国語学』154集 pp.117-131
- 渋谷勝己（2007）「なぜいま日本語バリエーションか」『日本語教育』134号 pp.6-17
- 高木千恵（2005）「関西若年層の話しことばにみる言語変化の諸相」博士論文ライブラリー—大阪大学大学院文学研究科
- 高木裕子・丸山敬介（2007）「日本語教育におけるバリエーション教材と教育」『日本語教育』134号 pp.68-79
- 高村めぐみ・内藤真理子（2016）「関西在住短期留学生の方言意識と習得意欲」『関西学院大学日本語教育センター紀要』5 pp.23-30
- 田中ゆかり（2014）「ヴァーチャル方言の3用法『打ちことば』を例として」石黒圭・橋本行洋（編）『話し言葉と書き言葉の接点』ひつじ書房 pp.37-55.
- 西山教行（2010）「複言語・複文化主義の形成と展開」細川英雄・西山教行編（2010）『複言語・複文化主義とは何か』くろしお出版 pp.22-34
- 野田尚史・野田春美（2017）『日本語を分析するレッスン』大修館書店
- 伴紀子（1985）「『生活語』の教育上の配慮」『日本語教育』56号 pp.110-120
- 備前徹（1996）「在日外国人と方言」小林隆、篠崎晃一、大西卓一郎編『方言の現在』明治書院 pp.343-361
- 日高水穂（2017）「漫才の賢愚二役の掛け合いの変容：ボケへの応答の定型句をめぐる」『国文学』101号 pp.399-416
- 福田えり・小松知子（2018）「受入交換留学生及び留学生別科留学生を対象としたニーズ及び実態調査の報告」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第27号 pp.71-90
- 三原龍志（2018）「JEP Kyoto プログラムの開発とその経緯」『龍谷大学グローバル教育推進センター研究年報』第27号 pp.91-101
- ロング, ダニエル（1992）「日本語教育における『方言教育』の問題点」『日本語教育』76号 pp.42-54

参考教材

- 国際交流基金関西国際センター「KC クリップ 方言」
 〈<http://www.jfk.jp/clip/activity/kansaiben.html>〉 2021年1月18日閲覧
- 国立国語研究所「方言ロールプレイ会話データベース」
 〈<http://hougen-db.sakuraweb.com>〉 2021年1月18日閲覧
- 方言文法研究会「全国方言文法データベース＜接続詞関係＞原因・理由—会話例 調査地点一覧—」
 〈http://hougen.sakura.ne.jp/db/cs_geninriyu/k_map.html〉 2021年1月18日閲覧